

R 報告書 Report



第11回
全国校区・小地域福祉活動サミット
in NIKKO

Contents

2- 3 概要

- 2 開催概要／スケジュール
- 3 概要（分科会一覧）

4-51 全体会・分科会

- 4 基調講演
- 5 分科会①（テーマ：居場所）
- 9 分科会②（テーマ：中山間地域のまちおこし）
- 13 分科会③（テーマ：子どもの貧困）
- 17 分科会④（テーマ：認知症）
- 21 分科会⑤（テーマ：共生社会・参加）
- 25 分科会⑥（テーマ：災害・防災）
- 29 分科会⑦（テーマ：多様な連携・協働）
- 33 分科会⑧（テーマ：福祉教育）
- 37 分科会⑨（テーマ：新たな地域づくり）
- 41 分科会⑩（テーマ：住民主体の場づくり）
- 45 シンポジウム
- 49 まとめ
- 51 その他（おもてなし・物販・交流会）

52-54 経緯・経過（ロードマップ）

55 参加状況

56-57 登壇者名簿（実践報告者・コーディネーター等）

58-62 実行委員会

- 58 実行委員名簿
- 59 企画運営委員・事務局名簿
- 61 実行委員会会則

63-70 データ（参加者アンケート結果）

71-72 事業計画

- 71 事業計画（開催要綱）
- 72 メインテーマ／コンセプト

73-77 広報等

- 73 チラシ・封筒
- 74 開催要綱（募集要項）
- 75 ホームページ・Facebook
- 76 フラッグ・のぼり旗
- 77 当日配布資料

第11回

全国校区・小地域福祉活動サミット
in NIKKO

概要

開催概要／スケジュール

名 称	第11回全国校区・小地域福祉活動サミットin NIKKO
日 程	2017年（平成29年）11月30日（木）～12月1日（金）
会 場	日光市藤原総合文化会館（全体会・分科会） 日光市鬼怒川温泉大原1404-1 TEL0288-76-1201 きぬ川ホテル三日月（分科会） 日光市鬼怒川温泉大原1400 TEL0288-77-2611
参加者数	846名
対 象	小地域福祉活動に関心のある方、自分のまちを良くしたいという思いをもった方
主 催	第11回全国校区・小地域福祉活動サミット in NIKKO実行委員会 社会福祉法人 日光市社会福祉協議会
共 催	日光市／(社福)栃木県社会福祉協議会／(社福)栃木県共同募金会／宇都宮大学 小地域福祉活動を楽しむ全国ネットワーク
後 援	厚生労働省／(社福)全国社会福祉協議会／栃木県／(株)下野新聞社

日	時	内 容
11月30日(木) 1日目	12:30～12:45 <会場> 藤原総合文化会館	オープニング
	12:45～13:45 <会場> 藤原総合文化会館	基調講演「小地域の"モト"」
		休憩・会場移動（13:45～14:15）
	14:15～17:15 <会場> 各分科会会場	分科会「小地域×○○」
		休憩・会場移動（17:15～18:00）
	18:00～20:00 <会場> ホテル三日月	交流会
12月1日(金) 2日目	9:00～10:45 <会場> 藤原総合文化会館	シンポジウム「実践！小地域活動!!」
	10:45～11:30 <会場> 藤原総合文化会館	まとめ～未来へつなぐ「誇り」～
	11:30～12:00 <会場> 藤原総合文化会館	クロージング

概要

分科会一覧

区分	分科会/会場	内容
小地域 × 活かす	1 藤原総合文化会館 ホール	目からウロコ!気軽に集える居場所づくり
	2 ホテル三日月 さくら亭「サザンカ」	思わず唸る、「まちおこし」のイロハ ～過疎地域の活性化のヒントは「誇り」「仲間づくり」「ビジョンの共有」!?～
小地域 × 支える	3 ホテル三日月 さくら亭「天空(4)」	動かすにはいられない! ～貧困を理由に子どもから"機会"を奪わないための取り組み～
	4 ホテル三日月 さくら亭「天空(2)」	"認知症"だからじゃない、つながる地域を考えよう ～認知症の隔たりがない、人と人がつながるやさしい地域づくり～
	5 ホテル三日月 つばき亭「ひなぎく」	「ずっと聴きたかった…」「ずっと言えなかった…」 ～"共に生きる"を語り合おう!～
小地域 × 強める	6 ホテル三日月 つばき亭「つつじ(1)」	不安だったけど…"地域"を守った日ごろの活動 ～災害と地域の福祉力～
	7 ホテル三日月 さくら亭「天空(1)」	パートナーシップによる地域福祉"倍増"計画! ～知っていますか?連携による地域活動の大きな効果～
小地域 × 育む	8 ホテル三日月 さくら亭「天空(3)」	やっぱり故郷があったかい! ～子どもの郷土愛を育む福祉教育～
	9 栗山・川俣地区 川俣集会所	きっと誰かに伝えたい、地域と高校生の物語 ～過疎化に立ち向かう新たな"縁"をつなぐ地域づくり～
小地域福祉 活動を楽しむ 全国ネット ワーク企画	10 藤原公民館 会議室	住民主体を育む場づくり ～ほんとの住民主体とおしきせ住民主体の境界線～

小地域の“モト”



オープニングでは、サミットをイメージさせるムービー上映の後、斎藤文夫会長による挨拶があった。

講師

牧里 每治 氏

関西学院大学 名誉教授
関東学院大学 客員教授
小地域福祉活動を楽しむ全国ネットワーク
代表世話人

Point!

基調講演では、はじめに、数人の思いから始まったサミットが広がりを持ちながら継続し、新たな活動に繋がっていることを確認した。そして、サミットの2日間は「思う存分に福祉の話しをしよう」と問い掛けた。

次に、社会情勢の変化から地域の課題も変化しているため、現在の課題に対応した取組みが必要であるとし、サミットを通して自分で何かをやろうとしている人が増えているとことを具体的な事例を通して共有することができた。そして、小地域で活動に取り組む意義として、日常生活と繋がっていること、地域は人が居る限り宝の山であることなどを確認することができた。

最後に、サミットのテーマである「誇り」が活動の源であることを問いかけ、次の分科会への導入とした。

目からウロコ!気軽に集える居場所づくり



実践報告者

土田 忠明 氏とうふの会
会長**大類 智枝 氏**えがおをつなぐとちぎ木育の会
会長**西澤 淑恵 氏**まちの縁側育みプロジェクトながの
事務局

コーディネーター

大石 剛史 氏国際医療福祉大学 医療福祉学部
准教授

Point!

気軽に集える場所づくりをテーマとした分科会では、さまざまなサロン活動や居場所づくりのアイデアについて考えた。その中で、これからイキイキと地域で生きていくためには人と人とのつながり、人と地域のツナガリが重要であると参加者全員で共有した。

参加者からは、男性が来るアイデアに対して、お酒、男性の役割をつくる、声かけをする、趣味を活かすなどの意見が出された。また、多世代が来るアイデアに対し、子どもを主人公にする、働くママの出やすい企画、パパを巻き込むなどの意見があった。さらに、みんなが気軽に集まれるアイデアに対し、いかに自由であるか、自宅の活用、ラジオ体操などの意見があった。

ちょっとしたことから、地域の中に色々な人とツナガリをツくれるサロン活動や居場所づくりが必要だと改めて感じる事ができた。

分科会のねらい

居場所づくりのヒント

一人ひとりの「居場所」とは？

今、人と人との関係性が希薄化していると言われるなかで、交流や生きがい、楽しみや仲間づくりを目的とした居場所づくりが注目されている。

この分科会では、身近な地域での居場所づくりについて活動実践者からの報告をもとに作り方のコツやアイデアについて探る。

分科会の内容

1. 講義

講義「集まってしゃべればみんな元気！地域サロンの意義と魅力」

何故、今、地域の中にサロンが必要なのかを参加者に投げかけ、今のコミュニティの現状、サロン活動の意義や成功のポイント、社会的つながりをつくることの大切さ等についての講話があった。

2. 実践報告

①とうふの会

男性を地域社会に参加させる方法がないかとの相談をきっかけに発足。「豆腐一丁あればお酒が飲める」がコンセプト。ルールは「人の悪口を言わない」「難しい話をしない」。ざっくばらんに会話をすることで、コミュニケーションを深めている。

②えがおをつなぐとちぎ木育の会

子育て、教育、福祉などあらゆる分野において、人と木のふれあいをつくり、生活の豊かさと質の向上、国産材の需要拡大に努めている。多世代の人と人がつながるコミュニティをつくる場所「木育カフェ」をスターバックスにて運営している。

③まちの縁側育みプロジェクトながの

平成20年から地域コミュニティの再興を目的に、まちの縁側5,000ヶ所を目指し推進・実践している。自宅の玄関先に置いたベンチ、塀の黒板、畑、洋品店や八百屋など、日常の様々な場所が縁側になった。「地域の中に思いを持った人はたくさんいて、そのちょっとした思いを形にすることで、縁側につながっていく」。

3. ワークショップ

実践報告を聞いた後、下記のテーマに沿って個人ワークで付箋に書き出し、参加者全員で共有した。

①サロンアイデアのおすそわけ～わたしたち、こんなところを工夫しています～

②これだったらできそう！

- ・男性が来るアイデア
- ・多世代が来るアイデア
- ・みんなが気軽に集まれるアイデア

③質問・その他～もっと聞いてみたい、あんなことやこんなこと～

4. まとめ

約200名でワークショップを行ったことで、様々な意見やアイデアを持ち帰ることができた。これからサロンを始めるきっかけや現在行っているサロンを活性化するきっかけになったと感じる。

語り

参加者の声



- （「何かしたい」という思いを持っていても）難しく考えすぎてしまって一歩踏み出せないでいたが、今回の事例を聞いて「できることから始めればいいんだ」というような気づきを得られた。
- 「これだったら自分たちの自治会に持ち帰ってできそう」との前向きな意見が聞かれた。
- 「こんなサロンもあるんだ」との驚きや「これだったら自分たちにもできるんじゃないかな」と実感してもらえた。
- その他、「身近な内容ばかりで良かった」「具体的な取り組みが聞けてよかった」との意見が聞かれた。

ふりかえり

- 参加者、分科会運営側ともに新たな気づきがあり、今後の活動の参考になった。
- 具体的な取り組みの事例を聞いたことで、サロンや居場所づくりがより身近に感じられたと思う。
- ちょっとしたアイデアで人と人がつながり、地域の中に居場所ができることを参加者全員で共有した。

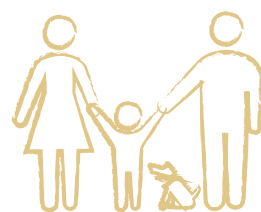


担当者コメント

- 約200名という大人数でワークショップを行ったことで、たくさんの居場所づくりに関するアイデアやヒントを持ち帰ってもらうことができた。
- この分科会に参加したことをきっかけに、全国各地で1つでも多くのサロンが増えてほしい。
- 和やかな雰囲気で行われたため、大人数にも関わらず、アットホームな分科会となった。
- 参加者同士の意見交換の時間が設けられなかったことが残念。
- 男性サロン、多世代交流、まちの縁側とそれぞれ特徴ある実践報告をしてもらうことにより、サロンを幅広く理解して頂き、気軽にサロンを始めるきっかけになった。
- ワークショップ時、限られた時間ではあったが、登壇者と参加者が交流する時間を設けられたことが良かった。

今後へのつながり

- 参加者からは、「視野が広がった」「自分にもできそう」「車庫にベンチを置いてみようかな」「地元に戻ったらみんなに声かけてみたい」等、今後につながる意見が多く聞けた。
- 地域の方々がサロンの知識を得ることで、多様なサロンが立ち上がるきっかけとなることを期待する。
- この分科会に参加したことにより、地域に戻って気軽にサロンや居場所作りを始める人が増え、広がってほしい。
- 運営側としても今後の業務に活かせる内容だったため、様々なアイデアを情報発信できるようにしたい。



テーマ：中山間地域のまちおこし

思わず唸る、「まちおこし」のイロハ

～過疎地域の活性化のヒントは「誇り」「仲間づくり」「ビジョンの共有」!?～



実践報告者

中山 京氏

あしお民立こども大学
代表

加納 麻紀子氏

NPO法人くまの木 里の暮らし
事務局長

コーディネーター

川本 健太郎氏

立正大学 社会福祉学部
専任講師

Point!

この分科会では、過疎地域における「まちおこし」をテーマに、事例発表、グループワークを行い、まちおこしに大切なことは何なのかを見つめ直した。

地域で培った生活の積み重ねを学び、地域で「イキル」ことを学ぶためには、できないことは抱え込まず、心を開いて、外（ヨソモノ）に頼り「ツナガル」ことが重要だということ。そして、「まちおこし」に関わる人たちが一つとなる地域を「ツクル」ことが大切だということを確認した。最後に、一番大切なのが、活動者である「私」自身が楽しく、自分にとって何が必要なのかを考え実践すること。楽しさのおすそ分けで仲間も広がる。

行政などのまちづくりに係わる機関からの強制ではなく、自分のやりたいこと、必要だと思うことを行動し、関係機関とともに歩み、やらされ仕事ではなく「楽しい」活動にすることが大切であることを共有した。

分科会のねらい

まちおこしの本質を探る

過疎化が進む地域では、その地で暮らす住民によって身近な地域資源を活かした“まちおこし”が行われている。この住民が「まち」を「おこす」取り組み実践は、実は日常生活の何気ないところにヒントが隠されている。

この分科会では、そのまちおこしのポイントを学びながら、その活動が地域にもたらす変化と可能性を考えていくことで「まちおこし」の本質に迫っていく。

分科会の内容

1. 講話（導入）

日本の現状として、様々な社会の変化から、各地で過疎化が進行し、地域住民の生活に様々な影響が生じている。まちおこしの活動とは、「その地域に住む人が、より良い生活が出来ることを目指す活動」とし、住民主体を原則とした住民とヨソモノ（Iターン、行政職員などの専門職）の協働によってなされる活動。ヨソモノ主導だと地域の“諦め”につながる。とはいえ、住民だけが丸抱えだと新しい発想が生まれにくい。互いが心を開き、同じ目標を見据えて活動する必要がある。

2. 事例発表

①あしお民立こども大学

足尾の小学生を対象に「こどもの自主的な学び場」として寺子屋事業を実施。地域からの未来の担い手（子ども）を育てたいとの声を受け始まり、足尾の住民がサポートし、地域資源の再発見・利活用、住民の得意分野を活かした授業を行っている。「まちづくり、活動者よがりの活動ではなく、地区課題を解決するもの」「地域生活の充実と地域で育つこどもの選択肢の拡大」が大切。

②特定非営利活動法人 くまの木 里の暮らし

廃校（小学校）を活用し、都市農村交流の拠点施設・星ふるの学校「くまの木」を運営。地域の宝（小学校）を活用したいとの声を受け始まった活動で、地域の資源や農山村の環境を活用した体験学習や余暇活動などを実施。「地場産農作物の活用」「地域の宝をみんなで大事にする」「地域の（暮らしの）再評価」を運営の基本理念として、次世代につながる魅力ある地域づくりを目指している。

3. グループワーク

グループワークでは以下の3つの行程を経て、参加者が自身の活動を振り返り、その中で得られた“気づき”を共有した。

1) 個人ワーク

個々の活動を振り返り、活動の原動力（誇り）の要素を抽出し、付箋に記入した。

2) グループワーク

個人ワーク（まとめ）のグループ内共有、仲間づくりに必要なことを話し合った。

3) グループ内総括

誇りと仲間づくりを通じて、まちおこしに一番大切だと思うことをまとめた。

4. まとめ

まちおこしの基本は住民主体であること。そのためには、地域内外を問わず幅広い仲間づくりが必要であり、地域にとって必要とされていることを協働して行っていく活動が“まちおこし”である。活動者本人が楽しいと思うことを、仲間と共有しながら活動していくことが大切である。



参加者の声



- 総括シート（グループワーク）を見ると、「自分の地域が好きだ」「どうやれば仲間づくりができるのかがわかった」とのコメントが多かった。企画側が意図したように参加者の多くが「誇り」「仲間づくり」の視点のもと振り返りができたと思う。
- グループワークの時間では、自発的かつ熱心な意見交換がなされていた。
- 自分たちが行っている何気ない活動（自治会などのたまり場の運営等）がまちの活性化につながっている。
- 「地域の伝統や特性を大切にすること」「地域内外を問わず様々な人とつながることが大切だということ」「楽しい活動であること」など、まちおこしに大切な要素に気づいた。

ふりかえり

- 講話、事例発表（セッション形式）において、“まちおこし”から連想させられる「華々しい」「急激なプラスの変化」など、活動者を足踏みさせるような壁を取り除くことができた。
- グループワークにおいて情報交換を行い、その地域に住む人がより良い生活ができることを目指す活動が“まちおこし”であることに気づき、自らの活動に対する自信を持ち帰っていただくことができた。



担当者コメント

- 電話とメールの打ち合わせで不安はあったが、当日のランチミーティングで全員が目的と役割を共有することができ、やった甲斐のある企画になった。
- ランチミーティングにて登壇者の初顔合わせとなったが、初対面とは思えないくらい積極的に意見交換がされ、それぞれの考え方に共感する場面がみられた。活動は違って共通するものが多いと感じた。
- 当初、グループワークにて3つの要素（誇り、仲間づくり、ビジョンの共有）を分析するプロセスを経て、グループ内での総括（まちおこしに一番必要なこと）に至る予定であったが、2つの要素（誇り、仲間づくり）に絞ることになった。その結果、グループワークがスムーズに進行し、多くの方が、自分の地域・活動にある「誇り」に気づき、ツナガルことの意義、「仲間づくり」の大切さを共有することができた。

今後へのつながり

- 自分が行っている活動が「まちの活性化」につながるとわかり、現在行っている活動への自信を再確認していただけた。
- 参加者同士、まちおこしに携わる“仲間”としてつながることができた。
- 何人かの参加者が、コーディネーターや登壇者に講演依頼などを持ちかける場面がみられた。
- 多くの方が自分の地域と活動を見直すきっかけになった。



動かすにはいけない!

～貧困を理由に子どもから“機会”を奪わないための取り組み～



実践報告者

畠山 由美 氏

認定NPO法人だいじょうぶ
理事長

石田 聡 氏

下野新聞社 那須塩原支局
支局長

母子の居場所

Your Placeひだまり卒業生

コーディネーター

石井 大一郎 氏

宇都宮大学 地域デザイン科学部
准教授

Point!

この分科会では、貧困家庭の子どもの支援者と当事者たちの声をとおして、生まれ育った環境によってふつうの暮らしができない子どもがいるという現状と、子どもは親以外の信頼できる大人と出会い、ツナガルことで自分らしくイキルためのきっかけがつかめることを知ることができた。

また、支援する側は行政や関係機関と協働し、ツナガルことで、それぞれの得意分野をイカシながら、効果的な支援ができることを学んだ。

子どもの貧困は家庭だけの問題ではない。私たち一人ひとりが地域にいる“子どもの貧困”という課題を知ること。そして、自分たちが目の前にいる子どもを見守り、支援機関にツナガルことが子どもの貧困に立ち向かう“始まり”と確認しあう分科会となった。

分科会のねらい

子どもたちの「機会」を守る

7分の1。

今、子どもの7人に1人が貧困状態にあるといわれている。子どもの貧困という問題は経済的な面だけではなく、子どもたちが育つ過程で経験する様々な「機会」を奪う原因になっている。貧困世帯にある子どもたちが豊かに成長していくために、何が地域の中で求められているのか。

この分科会では「貧困と子ども」をテーマに活動実践者の話しを通して考えていく。

分科会の内容

1. 事例報告・対談

①事例報告『希望って何ですか～貧困の中の子ども 取材現場から～』

下野新聞社 石田氏より、長期取材を通して見えてきた子どもの貧困の現状について、事例を用いて紹介があった。“信頼できる大人に出会うことで子どもの生活は変わる”、行政と協働した事例をふまえて、“支援機関がつながることの必要性”を投げかけた。

②対談

取材を通してつながった母子の居場所卒業生の祐樹さん（仮名、19歳）が登壇し、石田氏と支援機関へつながる前の生活状況や当時の思い、支援機関とつながった後の気持ちの変化等について対談した。

祐樹さんからは「支援が入る前は、家のトイレが使えない状況が当たり前で、誰かに助けを求めるといった考えはなかった。とにかく、自分で何でもやらなければという気持ちだった。信頼できる人に出会い、周りに期待されることが自分の励みになった。支援機関とつながらなければ、高校へ行っていなかったと思う。必要な支援は勉強が出来る場所と環境。今の夢は、結婚して子どもを作って普通の生活をする事」等の意見が聞かれた。

2. 講話

対談を通して“支援が必要な子どもは知らない”、“見えていないだけで身近にいる”ことを知った。

このことを踏まえ、NPO法人だいじょうぶ理事長の畠山氏よりSOSの声を拾い上げるための手法や、行政と協働することでそれぞれの強み・持ち味を生かした支援につなげられること等についての講話をいただいた。

3. ワークショップ

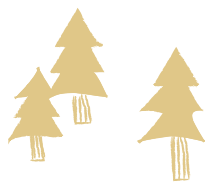
対談や報告を聞いて感じたこと、自分ができる取り組みを付箋に書き出し、グループ内で共有した。

4. まとめ

当事者の思いや貧困の現状を知ることを主眼とし、分科会全体の内容につながりを持たせたことで、知らない・見えていない現状に気づき、参加者間で共有することができた。

誇り

参加者の声



- 当事者から話を聞いたことが良かった。「普通の生活をして温かい家庭が欲しい」という言葉が心にささった。
- 祐樹くんの話がとても印象的だった。祐樹くんの未来にエールを送りたい。
- 子どもの貧困が意欲、学力、基本的な生活習慣まで身につけることを阻むことを知った。
- 支援者と一緒に実際に支援を受けた方のお話が聞けて、その内容がとても感動的だった。人間の強さを再認識することができた。
- 改めて子どもの貧困に向き合うことができた。特に、当事者の声はなかなか聞くことができない。今後の子育て支援のヒントを得ることができた。

ふりかえり

- 居場所卒業生である祐樹さんの言葉に対する反応が大きかった。当事者の思いを知る方法として、当事者の声を聞く場を取り入れたことは効果的だった。
- 子どもの貧困が身近な課題であることを知り、課題を理解した上で子どもに必要な支援および自分ができることを考えるきっかけになった。
- 具体的な取り組み（居場所づくりや学習支援など）のノウハウを学ぶというよりは、現状を知って“子どもの貧困”を自分事として捉え考える機会になった。
- 質疑応答の時間も参加者から多くの質問が出され、参加者と登壇者のやりとりで対談および講話の内容をさらに深めることができた。
- “質疑応答→個人ワーク→グループでの共有→全体での共有”とワークショップの流れを工夫したため、参加者が主体的に参加することができた。



担当者コメント

- 祐樹さんと畠山さん、石田さんとの関係が深く、最高の対談だった。
- 登壇者を交えて事前に2回ほど打合せの場を持つことができたため、分科会のねらいや落としどころを十分に共有することができた。登壇者と企画運営委員全員でつくり上げた分科会になった。
- 分科会を担当し、今まで接点の少なかった「子どもの貧困」という課題に目を向けるきっかけとなった。
- 今回、居場所卒業生の祐樹さんが初めて研修会という場に登壇した。祐樹さんが自分の経験や体験を初めて人前で話し、「自分の話で感動してくれる人がいるなんて！こういうのも悪くないですね」と話していた。様々な経験をし、今を一生懸命生きている祐樹さんは日光市の宝であり、その経験を広く伝えていける貴重な人材であると感じた。
- グループワークにもう少し時間を取れば、取り組みのアイデアを深めることができ、活動内容をより具体化できたと思う。

今後へのつながり

- 市民活動として『子どもの貧困に立ち向かう』ことはハードルが高いことだと思うが、参加者から「今日のことを知り合いや友達に話す」「学習支援なら手伝えそう」「探すのではなく出会ったら動く」「近所に不登校の子がいるので、母親と話し合ってみる」「まずは勉強会をやりたい」「『子どもの居場所づくり』地域で何が出来るのか改めて考えさせられた」「小さなSOSに少しでも寄り添いたい気持ちを出し続ける」など、今後につながる意見が多く聞かれた。参加者が地域に戻り、取り組みを形にしていくことで、生まれ育った環境に左右されず、すべての子がふつうに暮らせる地域づくりにつながってほしい。
- 登壇者全員が県内の方だったため、今回参加者と登壇者がつながりを持ってたことで、（県内で）活動する際のネットワークづくりの場にもなった。活動者または関心のある方が、横の連携を図れる場が身近な地域に増えていくといい。



テーマ：認知症

“認知症”だからじゃない、つながる地域を考えよう
～認知症の隔たりがない、人と人がつながるやさしい地域づくり～



実践報告者

水野 嘉子 氏

にっこう認知症・若年性認知症の
家族の会
副代表

老門 泰三 氏

川崎市宮前区土橋町内会 副会長
宮前第二地区社協 会長

水野 貴美子 氏

コーディネーター

永島 徹 氏

NPO法人風の詩
社会福祉士

Point!

この分科会では、認知症や若年性認知症の方々への支えとなる、人と人、人と地域のつながりについて話し合いを行った。

認知症の方、その家族が、自分の住む地域で生きるためには周りの人の支えがあることででき、そのためには高齢者から子どもまで世代を超えたつながりから、誰でも居られる居場所づくりと、参加できるきっかけづくりを、一人ひとりが考え、実行することの大切さを確認した。

分科会のねらい

誰もが安心して暮らしやすい地域づくり

近年、高齢者に限らず若年性認知症の方も増加し、本人やその家族は日常生活において様々な問題を抱えている。認知症の方々が地域であたりまえの暮らしを実現していくためには公的なサービスだけではなく、身近な地域での支えが必要になる。

そこで、この分科会では、小地域で活動している実践者や実際に若年性認知症の方を身内にもつ家族からの話を通じて、“一人ひとり”ができることや“人と人のつながり”のあり方、さらには認知症の隔たりがない地域について考えていく。

分科会の内容

1. 講義

コーディネーターの永島氏より、認知症や認知症状についての講義。また、認知症の方や家族が地域で暮らすには何が必要かについて問題提起された。

2. 実践報告

①神奈川県川崎市宮前区土橋町内会

土橋町内会副会長の老門氏より、自治会活動からオレンジカフェ（土橋カフェ）の開設に至った経緯、現在の取組や課題についての報告があった。

土橋カフェでは「認知症の方を支える地域づくり」を目的に、地域住民と専門職のみでなく、当事者もスタッフとして相談、講話や音楽会を行っている。地域包括ケア連絡会と連動し、認知症や問題のある方へのアプローチや認知症サポーター養成研修なども積極的に行っている。また、過去のカフェ利用者のフォローアップとして、ボランティア「認とも」への誘い出しやカフェへの送迎なども行っている。

課題としては場所やスタッフの時間の制約から、月1回の開催が限界であることがあげられた。そのため、研修やサロン等を通じて当事者の誘い出しや、広報等による地域住民への啓発を行うなど、地域での支え合い意識の向上を図っている。

②にっこう認知症・若年性認知症の家族の会

家族の会副代表の水野氏より、若年性認知症に罹患されたご主人への介護の経験談、ご息女の貴美子さんから自らの手記が披露された。

専門機関や専門職のみでなく、地域住民や同じ思いを共有できる団体、まわりの人とのつながりの大切さ、それが認知症の方やその家族の支えとなることを伝えた。

3. グループワーク・発表

参加者を7名程度のグループに分け、「地域に持ち帰り伝えたい事」「事例発表の所感」などについて意見交換した。

事例発表者も各グループに参加し、参加者と一緒に認知症を支える地域づくりについて意見交換を行う。グループでは、「地域での活動を再確認している」「地域の実情から新たな活動をつくることは難しい」との意見もあったが、認知症を支える地域づくりには、「高齢者のみでなく多世代のつながり」「通い集う場があると良い」などの意見もあった。

4. まとめ

認知症の方やその家族が地域で暮らすためには、まわりの人たちとのつながりを持つ重要性、つながるきっかけづくりの大切さを確認した。また、高齢者や認知症の方のみでなく、現役世代、次世代を含めた地域でのネットワークをつくっていくことが地域づくりにとって不可欠であることを、一人ひとりが認識できた。



参加者の声



- 積極的に行っている自治会の取組を知ることで、参加者自身の地域との比較ができ、活動の再確認につながった。
- 若年性認知症の体験談、手記の報告では、当事者しかわからない思いや実体験を知ることができ、感極まった様子うかがえた。
- グループワークでは、個人や地域でできる活動について、前向きでとても活発な意見交換がされた。
- 人と人を認め合う大事さ、地域力を高めるには、助けられ上手になる必要がある。
- 認知症当事者の報告に心打たれ、「入口は認知症、出口は地域づくり」を実践していこうと強く思える分科会だった。
- 当事者との対談形式がとても良かった。
- 若年性認知症の方を介護する家族の思いが生で聞けて良かった。

ふりかえり

- 認知症当事者や高齢者に限らず、現役世代、次世代ともつながることの大切さを学んだ。（現役世代、次世代にも目を向けた地域づくりの意識を高める）
- 若年性認知症の方への介護の体験談、自治会での取組を知ることで、身近な問題として捉えることができ、「認知症は個人・家族の問題でなく、地域の問題であること」「地域で考え、当事者や家族を支えるための“地域づくり”が必要であること」の再確認や個々の意識高揚につながった。
- 事例発表や意見交換、まとめなど、もう少し時間をかけて行えれば、より地域の活性化や発展への議論が展開できたと思う。



担当者コメント

- グループワークでは、これまでには見られないほど、参加者同士が活発に意見交換をしていた。コーディネーターや登壇者の“伝える力”が、参加者の意識を高めることにつながったと思う。
- 企画の段階からコーディネーターよりきめ細かなアドバイスをいただき、登壇者の方々とも発表内容の打ち合わせだけでなく、活動への思いや考え方などにも触れる機会となった。大変貴重で有意義な時間を過ごせた。
- 企画運営委員のメンバーには、一緒に企画するだけでなく、実際の活動に参加しながら内容の検討ができたことに感謝している。今回のつながりは今後の宝。
- 認知症当事者の家族の手記は、非常に説得力があった。参加者にも思いが伝わり、当事者や家族の抱える課題への理解が深まった。また、地域で実践している活動を知ることによって「認知症だから大変」で終わるのではなく、「地域で支えることが大切」という視点の広がりにつながったと思う。

今後へのつながり

- 今回のサミットをきっかけに「変化したこと」など、情報交換できる場があると、さらにサミットの成果が上がり、活性化につながると思う。
- 今回の先進事例を参考に、認知症を切り口とした「認知症のへだたりがない、世代を超えた地域の集まりの場」が各地でできると良い。そのためには、地域住民だけでなく、専門職間が一層地域に関心を持ち、地域住民と共有していく（つながり）必要があると感じます。
- 現在、様々な活動を行っている自治会、地域はあるが、その活動を発信できる場、実践を考えていく場が、市レベル、小地域単位で開催できると良い。



「ずっと聴きたかった……」「ずっと言えなかった……」
～“共に生きる”を語り合おう～



実践報告者

椎名 保友 氏

NPO法人日常生活支援ネットワーク
障害者地域生活支援活動コーディネーター

横田 能洋 氏

認定NPO法人茨城NPOセンター・
commons
代表理事

コーディネーター

廣瀬 隆人 氏

一般社団法人とちぎ市民協働研究会
代表理事

Point!

この分科会では、障がい者の支援を行っているNPO、外国人支援を行っているNPOの取組から「誰もが共に生きる社会」について考えた。

グループワークによる参加者同士の意見交換を通して、障がい者や外国人との固定的な関係性を転換して「友人」としてつながる必要があること、彼らの課題を共に考え、互いの力を活かし課題解決の経験を蓄積する必要があることを確認し、そうした関係を深め、その人を個人として尊重することが差別や偏見をなくすのではないかとまとまった。そして、具体的な取組案として、交流サロンや団体のイベントと一緒に参加する、母国の料理を教えてもらう教室などの意見が出された。

活動発表者からも「コミュニティに対して、その地域で暮らしている当事者が出会い、話せる機会をつくっていく」ことが必要ではないかとのコメントがあった。

分科会のねらい



分科会の内容



共生社会の実現に向けた取組

「共生社会」という言葉をいろんなところで耳にします。一人ひとりが違っていい、その違いを認め合い、共に生きていく社会を実現しようということが社会の目標として据えられています。しかし、一人ひとりの個性である「違い」を認めない、または拒否する現実には地域社会にまだまだ存在しています。

この分科会では、その「違い」に対する偏見を考えながら、共生社会の実現に向けた小地域福祉活動について考えていきます。

1. 導入

「自己紹介」「参加した理由」「期待すること」をグループで共有した。「共生社会について考えたい」「障害者の居場所」「引きこもりの方の社会参加へのヒント」「地域への理解を深めるためのエッセンスを学びあい」など、今までとは違った視点で意見交換したいとの意欲が見られた。

2. 活動発表

①特定非営利活動法人 日常生活支援ネットワーク「パーティ・パーティ」
20年前、障がい者への偏見・遠慮に直面しながらも「利用者と支援者」の関係ではなく、友達同士のサポートを行ってきた。障がい者自身がまちに出ることで、社会やまちづくりが変化してきた。
関係性の転換、関係を固定化しない、「助ける」姿勢では友達にはなれない。

②認定特定非営利活動法人 茨城NPOセンター・ commons
日系外国人は昔の日本人的感觉を持つが、個人主義。そのため地域との関係が深まりにくい。「よく知らない」から、指摘する人も少ない。そのため誤解や偏見が生まれ、閉鎖的になっていく。
日本人と違う価値観を受入れる、その人が持つ強みを地域で活かす、文字伝達は効果がないため顔見知りになる、「共に生きる＝共に悩む」こと。

障がい者と外国人。共通性がないと思われがちだが、ふたつの活動発表から「固定概念」「偏見」「差別」を意識した。

3. 個人&グループワーク

グループごとに「ふたつの団体に共通するポイント・キーワード」をまとめる。

一緒に行動・課題解決、固定概念や偏見を持たない、友達関係になるために「最初の人(＝キーパーソン)を見つける」「接点を持つ・見つける」「居場所づくり」がポイントであることを共有した。

4. 論点整理・まとめ

最後に、各グループのキーワードを分科会としてまとめる。
「共通の思い・認識」があるものを知る、選ぶ。その結果、従来の活動とはちがった側面の新しいチームづくりにつながる。
コーディネーションをする上で「いかに出会いをつくるか」「コミュニティに対して当事者が話せる機会をつくる」ことが必要である。

参加者の声

- タイトルを見て勝手に、引きこもりの方との共生について教えてもらえると思った。でも違っていただけで、自分も考えるきっかけになった。
- 障がい者施設同士のつながりが弱いと普段から感じていた。同じグループで意見交換するうちに、メンバーの意見に共感。県内からの参加者でもあり、今後自分たちの活動が繋がっていきるといい。
- 共生社会を考えているようで、自分自身が避けていた。「特別なことではなく普段どおりでいい」と肩の力が抜けた。
- 外国人は身近なところにいるのに、どうつながったらいいかわからなかったが、働きかけをするきっかけになった。
- 「えんたくん（円卓のダンボール）」がよかった。楽しい雰囲気の中で議論を深めることができた。
- 自分の取り組みを振り返る機会になった。（活動発表者）

ふりかえり

- 分科会関係者・参加者ともに気づきがあり、振り返る機会となった。
- 個人が持つ固定概念を崩し、新しい価値観や視野を得ることになった。
- 参加者に新たな視点（地域で障がい者や外国人とつながる具体的な方策）と共に、それについて生活者の視点で考える機会を提供できた。
- 「個人を尊重する・偏見を持たない」ということについて、新たな気づき・価値観の変容がしっかりと生まれたのではないかと感じた。
- 参加したことですべてはわからない。わからなくてよい。わからないから前に進む。これが大事だと思う。
- 具体的な行動を見据えた議論に至らなかった。（3時間という限られた時間では、今回の企画が限界）



担当者コメント

- 外国人の福祉・生活課題を「身近な地域にある福祉課題」と認識してもらうには、まだまだ時間がかかるようだ。しかし、その存在や現状・課題に触れたことで、「共生社会」という言葉の独り歩きではなく、それぞれの立場で意見を深め、改めて考えることができた。
- サミット全体の参加者数の「ばらけ具合」から、小地域福祉活動において障がい者や外国人に関するテーマを意識している人や事業の少なさを感じた。裏返すと、誰も気づいていない「暮らしの困りごと」も多く、喫緊の課題とも言えるのではないか。
- 参加者や私たちが日常生活の中で新しい価値観や行動を変えることで、その周りが少しでも暮らしやすい社会になっていくきっかけになったのではないかと思う。
- 自分自身が日頃感じていた「もやもや」がテーマだったが、現場実践者である活動発表者の的確な話を聞くことができ、良い刺激となった。このテーマに関心を持ち集った参加者にも、きっと何かが残ったはず。

今後へのつながり

- 障がい者自身、障がい者支援団体、外国人支援団体、福祉関係者が集う場が必要。でも、それをどこが行うのか。サミット終了後の取り組みとして、県・市レベルで継続することが、このサミットを実施した成果物になる。
- 障がい者や外国人の支援団体の「越境」や「他流試合」の必要性を感じた。全く違う分野の団体等と交流したり一緒に事業をしたりすることで、当事者との新たな関係性の構築が期待できる。組織の活性化にもつながりそう。
- いろんな立場・考え方の人たちと研修会や小規模な本音で語れる場を設け、共有や気づきを持つ機会があるとよい。
- 今まで自分の関係するフィールドに固執していた方も多いと思う。企画運営委員に関わったことももちろん、分科会の中でも横断的に関わることの大切さ、個人のつながりだけでなくごちゃごちゃとした関係の中から生まれる可能性を強く感じる事ができた。この価値観をどのように発展させていけるか。まさにここからがスタートなのだと思う。



不安だったけど…“^{まち}地域”を守った日ごろの活動 ～災害と地域の福祉力～



実践報告者

関本 昭氏

川治自治会
会長

高山 弘毅氏

Nukiito (ぬきいと)
代表

コーディネーター

李 仁鉄氏

NPO法人にいがた災害ボランティア
ネットワーク
理事長

Point!

この分科会の実践報告から、普段から行っている地域づくりが、結果的に防災・減災につながるということに気づくことができた。

また、防災のために…と難しく考えるのではなく、今ある地域の社会資源を活かしながら、人と人、人と社会資源などをつなげ、自分の住んでいる地域の防災へとつなげていくことが大切だと確認した。

「たいしたことはしていない。普段から困っていることがあれば声をかけている」という、災害時の住民の方の言葉を聞き、「災害時はいろいろな人がかけつけてくれるけれど、（地域が立ち上がるための強さは）最後は人とのつながりだ」ということに気づかされた。

今後、自分の住んでいる地域にあった防災・減災のあり方だけでなく、どのように地域で生きていくのかを考えさせられる分科会となった。

分科会のねらい

災害と日常の地域力との関係性

近年、「災害」という言葉が身近に感じられるほど各地で自然災害が頻発している。

この自然の力を未然に防ぐことはできないが、災害による人的被害を最小限に留めることは地域の力で可能になる。では、日頃からどのような小地域福祉活動の実践が地域の力を強くし、災害による被害を減らすことにつながっているのか。

この分科会では、被災された地域での事例をもとに日常的な小地域での福祉活動と減災の結びつきを考えていく。

分科会の内容

1. 実践報告

①栃木県日光市・川治自治会

川治自治会長の関本氏より、平成27年9月に起きた「関東・東北豪雨災害」の川治自治連絡協議会の取り組みについての報告があった。地域が孤立した状態で、行政や外部など“その場にはいない人達”には、自分たちの目の前で起こっている状況はわからない。災害が発生したときに住民自身で判断できるよう、日ごろからの地域づくり、人材育成が大切である。

②Nukiito (ぬきいと)

Nukiito代表の高山氏より、平成26年2月の大雪時の取組について報告があった。以前から群馬県前橋市において「前橋〇〇部」として共感を育む場、趣味や興味・関心でつながる場づくりが展開されており、「普段から共感に基づく地域づくり」が行われていたことで、危機的状況（災害等）でも「共感」でつながっていた「前橋〇〇部」の参加者が課題解決に向けて動いてくれた。今回の雪害だけに限らず、日ごろから困っている人も多いため、助け合いを習慣化するためには、「共感」してくれた人が継続してつながる場が必要である。

2. パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、実践報告者の話を掘り下げることで事例の内容をさらに身近に感じてもらうことができた。また、李氏から「地域の取り組み」「地域支援者と外部支援者の連携」「地域の資源（資材・人材など）を知ること」「リーダーシップと組織力」「地域の暮らしを知っていること」の必要性について、全国の事例を基に話がある。普段から行っている地域づくりが、結果的に防災・減災につながっていることを参加者に気づいてもらうきっかけができた。

3. 個人&グループワーク（防災力チェック）

個人ワークでは、自分の地域の防災について、チェックシートを用いて防災力チェックを行い、点数化した。その後、5～6人のグループに分かれ、チェックシートを基に、お互いの地域の防災の現状についてディスカッションした。

チェックシートの点数が低い地域でも、活動上の課題や自分の地域の現状について話すことで、共感や様々な視点からのアドバイスを得ることができた。また、普段は話す機会のない全国の参加者と意見交換をするなど、充実した機会となった。

4. まとめ

防災・減災の取組も大切ではあるが、普段の地域づくりや人とのつながりが何よりも大切であることを理解してもらえた。また、自分の地域について改めて考える機会となり、平時からの小地域福祉活動の重要性に気づいてもらえた。

誇り

参加者の声



- 2つの事例に対する反応が良く、特に、川治自治会への日ごろの地域とのつながりについての質問に対し、「普段から子どもたちと地域がつながっている」との回答に、会場の雰囲気が一気に和やかになった。
- 防災力チェックを行ったことで、自分自身の防災に対する現状などをしっかりと振り返りができた。
- グループワークでは話し足りないという方が多かった。
- 平時からの地域住民のつながりの確認と併せ、「自分たちの地域は自分たちで守る意識」を地域の中で醸成していくことが大切だと思った。
- 「様々な場面で結局は地域活動に繋がっている」ことがわかり、色々気づかされる部分があった。
- 災害が起こる前から地域の情報（職業や人材など）を知り、予め「どのような協力を得られるか」について把握することも大切である。
- 実体験の話のため、わかりやすく大切なところを的確に理解できた。

ふりかえり

- 自分の住んでいる地域の防災・減災について考える契機となった。
- 日ごろの地域づくりが災害時にもつながっていることに気づいてもらえた。
- 防災・減災に対する日ごろの活動や今後の活動に活かすためのツールとしての企画は限りなく目標に近く達成できたと思う。
- 防災・減災の取組に対し、具体的な活動内容について伝えきれなかった。

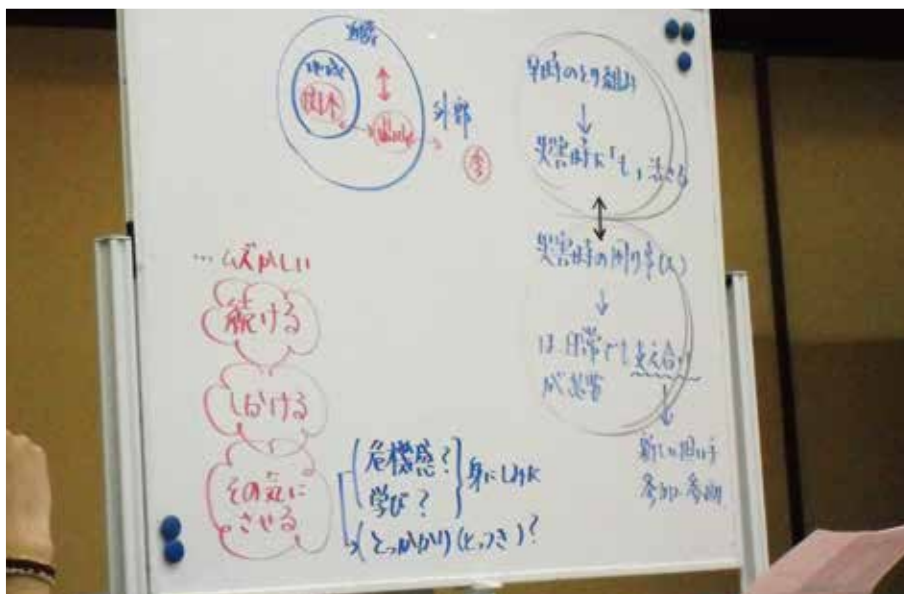


担当者コメント

- グループワークでディスカッションするだけでも、防災や減災などについての活動を理解できる場になっていた。
- 前段として地域の実践事例、日ごろの活動を伝えたことで、さらなるディスカッションの盛り上がりにつながったと思う。
- 様々な地域の方が一堂に会する機会だったため、もっと話し合う時間が必要だったのではないかと感じた。
- 事例報告者から発表の機会により「自分の活動の振り返りができた」「今後の活動に向けての自信がついた」との意見を聞くことができた。
- 「普段の地域活動が防災・減災につながっていること」に気づいてもらうことができ、企画者側としても改めて地域を見直す機会になった。

今後へのつながり

- 実践報告、全国の事例、防災力チェックシートによる地域の見直しから「日ごろからの地域住民同士の関わり大切さ」「普段からの小地域福祉活動の重要性」などという気づきの意見があった。
- 「続ける」「しかける」「その気にさせる」というキーワードが出され、様々な人たちを巻き込むことの必要性を全体で共有できた。
- 災害を切り口としたテーマではあったが、ここでの気づきや活動のヒントを地域に持ち帰り、防災に限らず様々な地域活動につながってほしい。



テーマ:多様な連携・協働

パートナーシップによる地域福祉“倍増”計画! ～知っていますか?連携による地域活動の大きな効果～



実践報告者

小栗 卓氏

スマイル日光プロジェクト
会長

石網 秀行氏

NPO法人福聚会 和久井亭
管理者

コーディネーター

長浜 洋二氏

株式会社PubliCo
代表取締役CEO

コメンテーター

長沢 恵美子氏

1% (ワンパーセント) クラブ
事務局次長

Point!

この分科会では、多様な連携・協働をテーマとして、連携による地域の課題解決に向けた取り組みを学んだ。実践報告では、企業の福祉活動やNPO法人、高齢者施設での地域との連携した活動を知り、グループワークを通して課題解決に向けた多様な機関との連携の可能性を探ることができた。

今まで地域福祉活動と関わりの少なかった企業やNPO、その他の機関等とのツナガリを考え学び、地域の中でお互いが歩み寄り「助けられ上手」「頼られ上手」となり、お互いの強みや利点をイカシながら、課題解決に向け、地域に住み暮らす人と人、企業や組織、団体が紡ぎだす大きな輪を創ることのできる可能性について、参加者全員で感じることができた。

分科会のねらい

つながる効果とその方法のヒント

「地域の担い手不足」や「活動がうまく地域に広がらない」など、地域活動をする中で様々な課題を抱えていないか？

そのような課題解決の一つとして、地元の会社や商店、NPO法人など、多様な分野とつながり、手を結びあうという方法がある。時にその効果は、課題解決のみならず地域活動をより活性化（加速化）させる可能性を秘めている。

この分科会では、企業やNPO法人の行う地域と連携した福祉活動から地域に存在する多様な分野との連携手法や効果、地域福祉活動を進めるヒントについて考えていく。

分科会の内容

1. 基調報告

1%（ワンパーセント）クラブ事務局次長の長沢氏より、「新たな視点から新たな価値を創造する連携・協働」をテーマに、SDGs（持続可能な開発目標）の本質や、マルチステークホルダー・アプローチに関する説明など、全国の実践事例を通した連携・協働を成功に導く鍵についての報告があった。

2. 実践報告

①スマイル日光プロジェクト

スマイル日光プロジェクト（日光市内の企業集団による社会貢献プロジェクト）の寄付つき商品（コース・リレーテッド・マーケティング）を通した地域貢献活動、各企業の持つ専門性を活かしたプロボノの活動についての事例紹介がある。全国でも珍しい企業連携、地域連携による貢献活動を展開している。

②NPO法人福聚会 和久井亭

高齢者デイサービス事業を展開する中で、地域から寄せられた様々な相談（課題）の解決に地域と一緒に取り組んでいる。今では障がい者の就労支援や引きこもりの方の居場所としての機能・役割を果たすほか、地元の八百屋と連携し高齢者の買い物支援を行うなど、多世代、多機能による連携活動にまで発展している。

3. ディスカッション

参加者等からの質問からのディスカッションを通して、活動の中から見えてくる連携や協働の必要性などについて掘り下げて考える機会となった。また、信頼関係を育むには一緒に汗を流すことが重要であり、そのための多様な機関とのつながり方、ともに活動を行う際のヒントについて考えることができた。

4. グループワーク

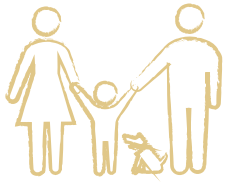
6名～7名のグループに分かれ、地域課題を解決していくために、活動に必要な連携先、連携先に求める役割期待等についてグループワークを行う。想定した地域課題は、「高齢者（①認知症、②移動、③孤立・孤独）」「子ども（①貧困、②いじめ、③虐待）」「若者（①就労、②孤立・孤独、③地域の担い手）」とした。グループワークを通して、地域の様々な連携先の可能性を模索することができた。

5. まとめ

基調報告、事例報告、グループワークを通し、日常的に関わることのない組織への理解を深めながら多様な組織との連携イメージを高め、または意識化することで、連携・協働を促進し、課題解決につながる。そのヒントを学ぶ機会となった。

誇り

参加者の声



- 事例報告に対する質問が多く、その反応の良さを示していた。（休憩時にも講師、登壇者4名への個人的な質問が続いていた。）
- グループワークもコーディネーターの問いかけが聞き取れないほど活発な意見交換がなされていた。
- 現実にある地域課題をグループワークの題材として取り上げたことで、参加者全員が意見を出せる雰囲気生まれ、積極的に意見交換する中で気づきも多かった。
- 課題に対するひとつの手法を整理できたと思う。
- 企業とパートナーになれるキーワードを学ぶことができた。
- アイデアとなる実践報告の要素を持ち帰って実践してみたい。

ふりかえり

- 3時間という限られた時間の中で、「参加者の所属する団体等の特長を活かしながら新たな連携先とつながり、活動が生まれていく」こと、その可能性を感じてもらうことができたように思う。
- 一事業者（NPO法人）と地域との連携、複数企業による連携という事例ではあったが、連携・協働の手法は決して一つではない、様々な可能性があるということを各々が学ぶことができた。
- グループワークでは、地域内の様々な団体や資源に気づくとともに、連携・協働を通じた地域課題解決の手法や実践活動のヒントを学ぶことができた。



担当者コメント

- 分科会の企画が思うように進まず、何度も繰り返し打ち合わせを重ねてきたが、ひとつの形となって実施できたことは、何とも言えない達成感を感じている。
- サミットで知り合った仲間たちとの“つながり”をこれからも大切にしていきながら、社協マンとして頑張っていきたい。
- 「連携・協働」という言葉はよく使われるが、実践レベルでは「できていない」ことが多い。それだけ難しいテーマに不安要素を抱えながらのスタートであったが、逆に、その可能性を実感できる機会となった。
- グループワークでは、参加者同士が積極的に意見を交換し、熱中している姿が見られた。グループワークの内容、発表や全体共有の方法（ワールドカフェ方式への切り替え）も良かった。

今後へのつながり

- 「連携」による取組の可能性が見えたことは、今後の実践につながる。
- 今回の学び（地域内の資源や団体についての理解、連携・協働のヒントなど）を各団体へ持ち帰り、団体内で共有することで様々な活動の広がりにつながるのではないかと期待している。
- 「福祉」という枠組みで物事を捉えてしまうと、それ以外の広がりが見出せないが、その枠組みの考え方をはずして多種多様な企業や団体とつながることで、より多くの多様な社会・地域課題を解決することにつながる可能性がある。
- 分科会や終了後の参加者の様子、アンケートの結果などを踏まえ、これからの多様な連携・協働による地域活動の創出が期待される。



やっぱり故郷があったかい! ~子どもの郷土愛を育む福祉教育~



実践報告者

小倉 孝司 氏

日光市立足尾中学校
教諭

軸丸 政代 氏

大阪市北区社会福祉協議会
主査

コーディネーター

新崎 国広 氏

大阪教育大学 教育学部
教授

Point!

この分科会では、「子どもと福祉教育」をテーマとして、「子どもの地域離れ」という課題を取り上げながら、参加者の皆さんが日頃かかわっている活動や、感じている想いなどを、熱く語り合い、共有した。

そして、「子どもの主体的な活動」「地域の想いをカタチにすること」「学校と地域がつながること」「助け上手・助けられ上手」などがポイントとしてあげられた。

その中で、学校や自治会などの様々な地域資源を活かし、協働しながら、子どもと地域の交流の場をつくり、子どもと大人がつながることで、より良い地域をつくっていける、そして、子どもたちの郷土愛、すなわち“地域への誇り”を育むことにつながっていくことを確認することができた。

分科会のねらい

地域における“ふくし共育”のあり方

今、将来の地域を支える担い手不足が課題になっている。このような問題を抱えた背景には子ども達の地域離れがあり、この問題の改善には、地域を担う子どもたちに向けた地域への“誇り（地元愛）”を育む福祉共育が求められている。

この分科会では、子ども、家庭、地域、そして学校が連携・協働する福祉共育の実践をヒントに、地域と子ども達の密接な関わりと子ども達の地元愛を高める実践のコツを考えていく。

分科会の内容

1. 講話

この分科会では、「子どもの地域離れ」という課題に焦点を当て、地元の子どもたちの郷土愛を育む福祉“共育”の在り方を考えた。

まず、コーディネーターの新崎氏より、導入講話として、「子どもを取り巻く現状と福祉教育（共育）」について、「福祉教育（共育）とは、子どもたちと地域住民が個々の地域特性を活かして“共に生きる力”と“郷土愛”を共に育ち合うこと」「今日、家庭の養育機能やコミュニティ機能の低下が進み、子どもを取り巻く問題は潜在化・深刻化しており、問題解決に向けたアプローチの一つとして、『多職種連携』『地域協働』による福祉“共育”の推進が求められている」ことに触れた。

2. 事例報告

①栃木県・日光市立足尾中学校「日光みらい科」

学校と地域の方々との共育を目指し、3年前から社会福祉協議会と共に活動をしてきた。地域学習をはじめ、最終的に地域の特産品を作る活動。その活動の背景には地域に対しての誇りをもち卒業させたいという願いがある。その過程において地域に根ざす各種団体や人とのつながりを大切にしている。学校と地域との連携は年を追うごとに広がりと深まりを増し、地域と共に育む体制が整いつつある。

②大阪府・大阪市北区「子どもの居場所事業」

区内T地区では、地域における子どもの居場所（遊び・癒しの場）づくりを切り口に、学習支援や食の自立（食育）支援にも一体的に取り組む「子どもの居場所事業」を推進。その運営にあたっては地元の住民ボランティアが主体となり、「地域の子は地域で育てる」を合言葉に、近隣の小・中学校や社協等の関係機関との連携も図りながら、子どもたちと地域とのつながりづくりを促進。現在、T地区以外でも居場所づくりの動きがあり、今後、各小地域への波及効果が期待される。

3. グループワーク

参加者各々が日頃関わっている活動や感じている想い等を付箋に書き出しながら、各グループで意見交換を行った。グループワークを通して、「子どもと地域とのつながり作り」「学校と地域との関わり（協働）」「親世代（保護者）への働きかけ」等がポイントとなり得ることを全体で共有した。

4. まとめ

分科会全体のまとめとして、学校や自治会などの様々な地域資源を活かし、協働しながら、子どもと地域との交流の場を作り、子どもと大人がつながることで、子どもたちの郷土愛（地域への“誇り”）を育むことにつながっていくということを確認することができた。

誇り

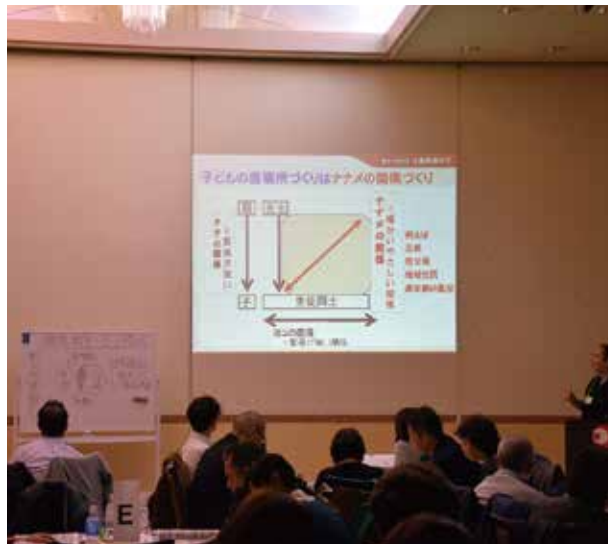
参加者の声



- コーディネーターの講話や事例発表が「良かった」「印象的だった」という声が多く寄せられた。熱心にメモをとる参加者の姿も多く見受けられた。
- シート記入式による質疑応答を行ったところ、32名の方から質問が寄せられ、参加者の関心度の高さが窺えた。
- グループワークにおいて、一般市民の参加者から「（当初用意していた）テーマが難しい」という声が多く挙がったため、内容を急遽変更してワークを進めることとなった。また、グループワークの時間をもう少しとってほしかったという意見もあった。
- 分科会終了後、地元の方をはじめ参加者各位から帰り際に「この分科会に参加して良かった」「参加費以上の収穫があった」と声をかけていただいた。

ふりかえり

- アンケートでは「分科会のタイトルと実際の内容とのギャップがあった」という声もあったが、特に事例発表について肯定的な感想が多く、この分科会で伝えたかった「地域を基盤とした福祉教育」の重要性を広く啓発することができたように思う。
- グループワークにおける各グループのまとめの中で、地域と学校との連携のあり方や、子どもと地域との交流の場についての具体的な意見が多く見受けられ、参加者各々が今後の指針を見出すことができたと思われる。



担当者コメント

- 企画運営委員兼発表者だったが、他の事例発表や基調講演が自分にとっても、とても参考になり、よい勉強の機会となった。また、他地区、他県の方々の意見も伺うことができ、今後に活かしていきたいと思う。
- コーディネーターや登壇者の日ごろの活動への熱意が伝わってくる話だった。参加者のディスカッションも白熱し、皆さんの熱い思いとパワーは、それぞれの地域に戻って炸裂することと思う。全国に仲間がいることはとても心強い。
- 顔見知りの参加者方に「分科会、すごく良かったよ」と声をかけられ、とても励みになった。学びだけでなく、笑いも多い和やかな分科会になったと思う。

今後へのつながり

- 福祉教育は学校や社協だけで進めていくものではなく、そこには地域住民の力が必要不可欠である。関係機関と地域が一丸となって「地域全体で子どもを育てる」という意識・環境をつくり、そして、子どもから大人まで皆が共に学び合える“共育”の形が地元内外にさらに広がってほしい。
- 事例報告を聞いた参加者から、「自分の地域でもやってみたい」という声があった。この分科会をきっかけに、参加者各々の地域での実践につながってほしいと思う。
- 分科会全体を通して、参加者それぞれが、自分自身が関わっている実践活動や地域の子どもたちに対し、様々な想いを持っているということを垣間見ることができた。今回のサミットのように、こうした想いを持つ人達同士がつながり、共有できる場が今後も必要だと感じた。



テーマ：新たな地域づくり(スタディツアー)

きっと誰かに伝えたくなる、地域と高校生の物語
～過疎化に立ち向かう新たな“縁”をつなぐ地域づくり～



実践報告者

平 英一 氏

川俣みらい委員会
前委員長

藤田 凌平 氏

山越 瑞貴 氏

NIKKO高校生ボランティアネットワーク
栃木県立今市工業高等学校2年

コーディネーター

永田 祐 氏

同志社大学 社会学部
准教授

Point!

この分科会では、新たな地域づくりをテーマに川俣地域へ行くスタディツアーを実施した。過疎化が進む川俣地区では、高校生と地域の方々が連携して地域づくりに取り組んでいる。

現地では、活動実践者である「川俣みらい委員会」と「高校生ボランティア」より活動の報告を受けた。

川俣地区の方と高校生のリアルな掛け合いからは、長い時間をかけて信頼関係を“つくって”きたことを感じた。一方通行にならないように、お互いが楽しむことを大切に活動に、高齢化集落で楽しく“いきる”工夫を感じた。

活動報告の後は、地域のおかあさん達が手料理をふるまい、参加者・地域の方々・高校生が交流会を行った。

限られた時間のなかでの交流となったが、地域と参加者が新たな“つながり”をつくることができた。

分科会のねらい

地域づくりの現場で知る

平家の落人伝説や独自の慣習、伝統が多く残る栗山地域は、過疎化が急速に進み、地域の担い手不足が深刻な課題となっている。

そうした中で、川俣自治会では地元の若者や行政、社協などと一緒に“川俣みらい委員会”を立ち上げ、市内の高校生ボランティアを新たな担い手として受け入れ、地域づくりに取り組んでいる。

そんな地域住民の“誇り”と“新たな縁”を創る舞台現場と秘境の地“栗山”を巡るスタディツアーを実施する。（定員30名）

※この企画は川俣地区での現地視察型のプログラムとして実施する。

分科会の内容

1. バス移動（車中での事前学習）

バス移動では参加者全員で「自己紹介」と「参加の動機」の共有を行った。実際に川俣自治会を訪問し、地域の方や高校生から話を聞くことへの期待値の高さからか、予定時間を大幅に超える自己紹介となった。その後、川俣自治会を含む、栗山地域の地域性について外の風景と照らし合わせて説明した。

2. 事例報告

到着後、はじめに、川俣みらい委員会前委員長の平氏より、住民と高校生が一緒に取り組んでいる地域づくり「カワマタスマイル。プロジェクト」について報告がある。

川俣地区は標高1,000メートル以上あり、豊かな自然に恵まれる一方で、過疎化・少子高齢化が深刻化し、地域の担い手不足が課題となっている。自治会として地域の存続を目指し、「川俣みらい委員会」が発足し活動している。

次に、高校生ボランティアネットワークの藤田氏、山越氏より、川俣地区で取り組んでいる活動の紹介と参加した感想の発表があった。

川俣地区の伝統的な祭事や自治会の清掃活動に「若い担い手」として参加することで社会の一員として責任を持って活動することを学んだ。また、自分たちが関わることで「川俣そば」の復活や、「心縁祭」という新たな祭りの創出につながり、地域のために“できること”があると実感できた。

高校生の発表後は、「部活に入った動機」「初めて川俣に来た時の感想」「2年間活動を続けて変わったこと」「これからやってみたい活動」について質問があった。高校生ならではの回答と、地域の方との掛け合いは会場を和やかにした。

3. 交流会

質疑応答も含め、参加者と事例報告者の交流会を実施（川俣自治会から報告者を含め9名、高校生2名と担当の先生1名が協力者として参加）

高校生や地域の方はもちろん、参加者同士も積極的に交流し、情報交換や仲間づくりの場になった。また、川俣自治会から「おもてなし」として「じゃがいもの煮っ転がし」や「山椒魚」「川俣菜の浅漬け」などが振舞われ、その距離を近づけた。

4. バス移動（車中でのふりかえり・まとめ）

分科会のふりかえり・まとめを行うにあたり、参加者全員から事例報告の感想について発表してもらった。また、帰りのバスには高校生と担当の先生も同乗し、先生の目線から「カワマタスマイル。プロジェクト」の活動を通じて感じた高校生や地域の変化についてコメントをいただいた。最後に、コーディネーターの永田氏より、事例の総評とこれからの地域づくりについてまとめを行った。

誇り

参加者の声



- 川俣の人と今市の高校生の活動・交流にふれた。「何もない山奥だけど、人の優しさや、あたたかさで必ず何かある」という高校生の言葉が印象的だった。
- 地域に出たのフィールドワークや、現地の方や高校生とふれあえたことがとても良かった。
- 活動の場に行き、地域の方とふれ合うことで、より理解が深まった。
- 川俣地区の方々の生の声が聞けて、楽しい分科会だった。
- 地域の実情に合わせて時間が進んだので、わかりやすく有意義な時間であった。
- 地域の方、関わる高校生、地域おこし協力隊から生の声を聞くことができ、発表・報告だけでなく、交流できたことが良かった。また、地域の料理も振舞ってもらい嬉しかった。

ふりかえり

- 活動の舞台を実際に訪れ、活動者と交流を図ることでより深く川俣地区での取組を知ってもらうことができた。また、目的のひとつであった、コミュニティ形成における仲間づくりや組織化の重要性については、川俣自治会から集まってくれた協力者の人数や高校生との信頼関係を見てもらうことで実感してもらうことができた。
- 車中の振り返りの際に改めて地域づくりについて考えてもらい、参加者からコメントをもらうことで、他人事ではなく自分のこととして考えてもらう分科会にできた。
- 小地域活動を応援するという視点では、川俣の方も活動を振り返る機会になると共に、多くの参加者が集まったことで活動や地域の誇りを再確認できる機会になった。
- ワーキング形式でなく、交流会という形をとったことで、自由度の高い研修になり参加者の満足度の向上につながった。



担当者コメント



- 分科会を通して、地域と高校生と参加者、また、参加者同士が新たなつながりをつくれたと感じており、それが一番の成果ではないかと思う。
- 視察先まで時間がかかり滞在時間が短いため、参加者にとって満足できるようなプログラムを提供できるか直前まで不安があった。しかし、バス内での事前オリエンテーションにおいて、コーディネーターによる参加者自己紹介や背景説明が奏功し、参加者の心の準備ができ、事例に入り込んだ状態で現地での事例報告・交流会に臨むことができた。
- 現地では登壇者の個性、こちらで用意した事業の写真パネル、関係者によるおもてなしのおかげで、登壇者との意見交換、参加者同士の会話が弾んでいたし、日光の山奥という特殊な環境での取組を体感してもらえたと思う。
- 登壇者と参加者の距離が近く、サミットの狙いのひとつである、小地域福祉活動を実践するもの同士の横のつながりの促進も果たせたと感じている。
- 現地在山間部ということもあり、積雪など天候不良により実施が危ぶまれる可能性もあったため、その際の対応についての検討が必要であったと感じた。
- 現地での事例報告には、登壇者だけではなく川俣自治会の方が多数参加してくれたため、川俣地域の雰囲気を実際に体験でき、地域の方々と高校生の関係性も体感できたと思う。現地視察型のメリットを活かした企画になったと感じている。

今後へのつながり

- 交流会の時間を通じて連絡先を交換した参加者もいた。今後も活動者同士の情報交換、共有をしていくことができる。
- 参加者と登壇者の交流の時間を設けることで、参加者にとっては興味のある内容を自由に聞くことができ、登壇者にとっては自分たちの活動を評価してもらうことでモチベーションの向上につながる双方に利益のある企画になった。
- 地域づくりの実践者が楽しく活動できることが大切であるため、まずは一緒に活動する仲間づくりをしていく。
- “地域づくり”を考える際に地域にある資源だけに目を向けてしまうが、川俣地区の事例を参考に、地域の内外に目を向けてたくさんの人を巻き込むことで幅広い地域づくりにつながっていく。



テーマ：住民主体の場づくり

住民主体を育む場づくり

～ほんとの住民主体とおしきせ住民主体の境界線～



実践報告者

野田 久美子 氏
板東 克子 氏
田山 眞知代 氏
松永 致和 氏

ラ・ビスタささえ愛ネット
役員

徳谷 章子 氏

NPO法人ハートフレンド
代表理事

ファシリテーター

勝部 麗子 氏

豊中市社会福祉協議会
福祉推進室長

Point!

この住民主体の場づくりをテーマとした分科会では、ほんとの住民主体を育む要素を考えた。

実践報告では、住民自ら困りごとを解決したいという強い思いから生まれたボランティア団体やNPOの取り組みを聞き、困りごとと支援をツナグための熱意と創意工夫に驚きを持って聞き入った。

住民主体の福祉活動に求められる社協や行政等からの支援として、住民が福祉活動への一歩を踏み出すために、あらゆる相談にのる、住民と協働できる体制を専門職側が整えることも重要であること、お金だけ・最初だけの支援ではなく伴走する支援が必要であり、それは地域の中に入らなければできない・言えないのだということを感じさせられた。我が事の困りごとを中心に置いた、住民の思いと力をイカシ、専門職と協働してツクル、「住民主体」について考えることができた。

分科会のねらい

ほんとの“住民主体”を問う

「住民主体」を合言葉に、小地域福祉活動の輪が全国に広がっている。しかし、ときにその合言葉は便利使いされ、気づけば政府や行政、ときに社協や研究者からの押しつけのようになっていたり、教え込まれたりするような場面も少なくないのではないか。

この分科会では、住民自らが決定し、活動や事業を創っていく過程の中で、ときには対立を乗り越えながらも「住民主体」をいかに育てていくか、その場づくりを参加者とともに、失敗談も含めてぶっちゃけトークでしゃべり明かす。

※小地域福祉活動楽しむ全国ネットワーク企画

分科会の内容

1. 導入

“住民主体”という言葉は、住民にとっては生活の場である地域で、課題を発見し、その課題を乗り越える大変さを伴うものである。

この分科会では、住民主体の場づくりをテーマとし、「ホントの住民主体を育む要素」を考えた。

2. 実践報告

実践報告では、住民自ら困りごとを解決したいという強い思いから生まれたボランティア団体やNPOの取組みを聞き、困りごと支援をツナグための熱意と創意工夫に驚きを持って聞き入った。

3. グループワーク

①ラ・ビスタささえ愛ネット

兵庫県宝塚市にある2,900世帯8,000人の団地において住民主導で立ち上がった団体。「住民の困りごと」と「何が出来るか」の実態調査を実施し、地域の課題と担い手を把握した。困りごとを解決する仕組みとして、コーディネート者を配置。利用料金は1回1人200円としており、全額活動者に支払うこととしている。

高齢化が進みつつある大規模分譲マンションにおいて「住み続けたいまちづくり」から「だれもが住みたくなるまちづくり」を目指し、住民同士の支えあい活動とつどい場活動に取り組んでいる。

②NPO法人ハートフレンド

徳谷氏は、結婚を機に退職し、夫の実家の手伝いをしていたが、周りに友人知人のいない状況で3人の子育てを行っていた。そのような中、子ども会に誘われ、参加することにより孤独な育児から救われた。しかし、子ども会は、子どもが大きくなったら卒業となってしまうので、その後も関われる拠点がほしかった。特別に仮設消防署を借りることができ、寺子屋を始める。当初6人で始めた寺子屋も250人が来るまでになった。

現在、地域子育て支援拠点と児童デイサービスを運営。高齢者対象の「おとなのてらこや」事業や乳幼児親子対象の子育て広場、小学生対象の学習や遊びを通じて、出産から高齢者までの共生福祉のまちづくりを目指し活動に取り組んでいる。

4. まとめ

我が事の困りごとを中心に置いた住民の思いをイカシ、専門職と協働してツクル、「住民主体」について考えることができた。

誇り

参加者の声

- 先進的に行われている2つの事例を通して、自分の地域で悩んでいたこと解決できるような参考になる話が聞けたという意見があった。
- 会場内は、積極的に意見交換が行われ、発表や質問も飛び交っていた。
- いつでも相談にのってくれる支援、バックアップしてくれる支援をしてほしいという意見や、丸投げの支援、お金の使い方が限定されている等、限定的な支援は困るという意見など、活発な意見交換がなされた。

ふりかえり



- 地域福祉活動は「住民主体」をキーワードに全国的に広がってきた。しかし、住民主体という言葉は時として、便利な言葉として使われ、「便利使い」とも解されることもある。
- 本来、地域福祉活動は行政・社協から進言され、推進されるものではなく、真に住民が誠の生活感ののっとり、学び、行動し、時として、行政・社協に提案していくことが重要である。
- 「住民主体」という言葉は、きれいに示せば、当然のことと捉えることは可能だが、生活する地域で課題を発見し、それらを乗り越える大変さを伴うものでもある。
- 困難を乗り越える過程を「おしきせ」で行うのではなく、住民が楽しさを感じながら、活動を続けるにはどのようにしたらよいのか、活動の動機はどうだったのか、また、住民が大変さを感じる部分において、専門職は住民とどのようにかかわってもらい、これからどのようにかかわってほしいかを考える必要がある。



担当者コメント

- 普段から熱い思いを持って活動している姿が参加者にも伝わり、活発な情報交換、積極的な質問が行われた。登壇者と参加者、参加者同士が一体となって熱気あふれる分科会になった。机がない分科会であったため、膝を付け合せて話すことができ、新たなつながりがつくれたのではないと思う。
- 参加者同士が小地域福祉活動の状況の意見交換を行い、共感や解決の糸口を見出せる機会となっていたと思う。

今後へのつながり

- 住民の声を直接聞く方法の一つとして、アンケートの実施方法について考えていた参加者の方から「今回の事例の手法（困りごとを聞くときに一緒に活動してもらえる方を探す等）を参考にして実施してみます」という声があった。
- 分科会で話し合ったことを基に、小地域を単位として住民主体を育む場づくりが進んでいくのではないかと感じた。





実践報告者

宮地 ゆみ 氏

久次良町自治会 副会長

佐藤 貞良 氏

磯長台の福祉を考えるつどい 代表

小松崎 登美子 氏

たまり場・たろう 代表

コーディネーター

藤井 博志 氏

関西学院大学 教授

コメンテーター

牧里 每治 氏

関西学院大学 名誉教授
関東学院大学 客員教授

Point!

シンポジウムでは、あらためて住民主体の意味を確認するとともに、小地域福祉活動の必要性とその可能性について考えた。

実践報告では、3名のシンポジストの違ったタイプの事例が提供され、幅広い参加者層が自らの立場で考えるとともに、地域福祉活動を進めていくにあたって、どのような課題があるかを深め、実践から生まれた課題の対策について、現在と将来の両面から参加者が考える機会となった。

そして、サミットのテーマである「誇り」を考えながら、活動の実践者に共通する部分が何かを共有することができた。

シンポジウムのねらい

活動活性化のヒントを探る

1日目の基調講演、分科会で感じ、議論してきたことを踏まえ、このシンポジウムを通して改めて参加者が内省するとともに、小地域福祉活動の実践から生まれた課題を洗い出し、その対応策を考えていく。

また、参加者自らが現在の活動を改めて見直すことによって、新たな活動の芽を生み出す機会とする。

シンポジウムの内容

1. 導入

「住民主体」とは住民が全てを行うのではなく、住民が暮らしづくりの権利主体であるということを確認するとともに、サミットは校区が「ミソ」であるが、校区と自治会圏域の関係を考えながら、小地域活動や住民の暮らしづくりをするとはどういうことか？その条件は何であるか？ということを考えたい。

2. 実践報告

①久次良町自治会

近隣のちょっとした手助けがあれば高齢者等が住み続けることを可能にする、という思いから自治会内に助け合いの仕組みをつくっている。女性みの活動部隊もあり、関係機関の協力を得ながら、困ったことを頼みやすい仕組みがあり、公的なサービスにならない制度の狭間にも取り組み地域の人々の生活を支えている。

②磯長台の福祉を考えるつどい

自治会の活動が衰退し継続性がない中、自分達の将来の不安に対応するため、福祉に関心のある住民を募って組織化し、自治会と連携しながら課題解決に取り組んでいる。独自の地域福祉推進計画を作成し、課題を見える化するなど、若い世代が住みたいと思う町づくりを目指している。

③たまり場・たろう

介護の必要な夫が一日楽しんで過ごせる場所として、最初はお茶のみ場から始まった参加者の要件等に制限を持たない居場所づくり。場をつくるコーディネーターの存在が当事者同士の身近な課題を明らかにし、お互いの特技やつながりによって取り組むことができる仕組みとなっている。

3. ディスカッション

地域住民が、地域の困りごとを自分たちで発見していくことや困りごとを地域という面で支えていくことについて話し合われた。また、今は活動者である支える側も何とか元気で活動をすることができているが、将来はこの担い手がいなくなったときの不安があり、若い世代にどのように参加してもらうか？また、若い人たちに帰ってきてもらうためにはどうしたらよいか？という課題の対応策についても話し合われた。

4. まとめ

活動の実践者は、共通して住民であることを楽しんでおり、信頼関係の重要性を重んじている。そして、地域への愛着が強く、誇りを持って活動しており、これが無くなると地域は衰退していく。育った地域に誇りを持てること、また、つくらなければならないものでもある。小地域活動とは、そういうことをやっているのではないか。一人ひとりの誇りが地域の誇りとなり、その誇りを次の世代にプレゼントしなければならない。

誇り

参加者の声

- シンポジスト3名による異なるタイプの具体的な事例は、参加者が自分の地域と比較して考えることができ、「参考になった」「勉強になった」など好意的な意見が多かった。
- 「事例をもっと詳細に」「質疑応答の時間がほしい」というような、時間が短いという意見も見られた。

ふりかえり



- 「住民であることを楽しむ」という参画のコンセプトは維持された。
- 登壇者については実践者としての選出ではあるが自治会の性質が強くなり、コミュニティの多様性の観点から非自治会員へのフォロー意識が欠落していたかもしれない。
- 家族が単身化していく中で、生活の基盤を支えるための「地域づくり」「支え合いづくり」の大切さを改めて感じる事ができたと思う。また、住民の暮らしづくりをしていくとはどういうことか？そのための条件とはどういうものか？ということ、聞いている参加者が自分たちの活動に引き寄せて、考えるきっかけにできたのではないかと思う。
- 三者三様の具体的な事例は、幅広い参加者層に対応し、それぞれの立場で共感できる内容となった。
- 時間的な制限はあるが、シンポジストの苦労話しや失敗談、質疑応答の時間などを設けることができれば、より充実した内容になった。



担当者コメント

- コミュニティソーシャルワーク実践における啓発は実践された。今後は潜在ニーズの課題の焦点化等の展開方法等のステップアップ研修が必要かと思われる。
- 住民のお祭り（檀上に上がるのも「NPO」などプロの実践家ではなく、「住民」）であるというコンセプトを個人的にはきちんと認識できていなかったの、それを踏まえてはじめて企画できていたら良かった。（企画する上でもう少し情報を入手したり、勉強すべきであった。）
- 分科会と違い、直接的に参加者の反応を得ることができなかったが、アンケート結果から、参加者が概ね満足して頂いているようで安心した。参加者が何か一つでも持ち帰ってもらうことができ、それぞれの地域での活動につながると良いと思う。

今後へのつながり

- このシンポジウムで「住民主体とは？」ということについて、改めて考えることができたのではないかと思う。また、そのことを参加した住民とともに考える機会になったことは、非常に大きな財産になったのではないだろうか。そのことは、支援するワーカーにとっても内省する機会となり、今後、協働していく上で大きな財産になったのではないだろうか。
- 小地域福祉活動サミットということで、単なる活動報告会ではなく、これからの小地域福祉活動について議論していこうという当初のねらいについて、時間的な制限はあったが、ある程度は達成することができたのではないかと思う。（結論を出すことではなく、議論を投げかけていくことが重要だと思うので）
- サミットは住民をターゲットとし互助機能の促進を目指した啓発活動である。この活動を如何にして組織化し地域における気づきの体制への昇華がされるかが課題となる。社協・包括等における地域診断において個人の力の発見のシステム構築をすることが第一歩である。
- 既に活動を実践している参加者には、その活動の更なる発展に繋がり、また、そうでない参加者にとっては、活動を始める後押しになると感じた。
- 住んでいる地域の課題について、その地域に見合った方法で取り組むことが無理の無い活動であり、より効果的であることを共有することができた。



未来へつなぐ「誇り」。。。“誇響”



ゲスト

涼 風花 氏

日本書道師範
日光観光大使

宝珠道心太鼓

分科会報告

企画運営委員

第11回全国校区・小地域福祉活動
サミットin NIKKO実行委員会

総括

牧里 每治 氏

関西学院大学 名誉教授
関東学院大学 客員教授

Point!

まとめについては、他では無い「視覚と音」でのアプローチを行った。

まず、クロージングムービーを上映し、1日目をふりかえるための導入とし、担当企画運営委員からの分科会報告にて、実施内容を共有した。

全体の総括を受け、参加者が地域への「誇り」を再確認し、さらなる活動への意欲を高める機会とした。そして、私たちの心に内在する「誇り」と「ツクル、ツナゲル、イキル」という行動とが織り成す小地域福祉活動の発展を願い、「誇響（※造語）」という言葉に表現してまとめた。

「誇響」の文字は、書道と太鼓によるパフォーマンスで書き上げられ、心と体に響き渡った。

その後、クロージングにおいて、次期開催の大阪府豊中市にフラッグを引き継ぎ、サミットの幕を閉じた。



担当者コメント

- 1日目終了後、各分科会担当者が夜まで頑張って報告書をまとめてくれたおかげで、参加者にも分かりやすい報告となった。
- 参加者の方々が真剣に聞いてくれている姿を見て、とても感激した。
- 参加者から「オープニングムービーやクロージングムービーの映像がとても印象的だった」「広範な課題をきちんとまとめられていた」「上手くまとめて“誇り”という言葉に導かれ感動した」「自分の生活の中にも“誇り”を持って生きて行きたいと思えるまとめだった」などの意見が聞かれた。
- 書道と太鼓のパフォーマンスは、「日光」のイメージとリンクし、参加者からも好評だった。
- 「誇響」という造語が受け入れてもらえるか心配だったが、好評で良かった。



第12回は「サミット誕生の地」へ

クロージングにおいて、次回（第12回）開催地となる「大阪府豊中市」へフラッグを引き継いだ。

豊中市は、このサミットの誕生の地（第1回開催）。次回、豊中市でお会いしましょう！

おもてなし・物販・交流会

おもてなしブース

11月30日（木）、藤原総合文化会館入口において、日光市内の企業による社会貢献団体「スマイル日光プロジェクト」による“おもてなしブース”を設置した。

〈おもてなし〉

- 日光産いちご（池田農園）
- 地元酒蔵の甘酒（渡邊佐平商店）
- 日光ブレンドホットコーヒー（大和屋）
- こだわりのバームクーヘン（はちや）
- 地サイダー（登屋本店）



物販ブース

11月30日（木）、藤原総合文化会館ロビーにおいて、日光市内の障がい者事業所の共同受注事務局「大地」（事務局：NPO法人はばたき）および「スマイル日光プロジェクト」の協力を得て、“物販ブース”を設置した。

〈物販〉

- パン・小物（NPO法人ふれ愛の森）
- パン・小物（社会福祉法人すかい）
- 寄付付き商品「Tシャツ」「小物」など（スマイル日光プロジェクト）



交流会

11月30日（木）18時より、きぬ川ホテル三日月において、参加者や登壇者等との交流を目的に「交流会」を実施した。

この日は、宿泊を含む285名の方々の参加があり、また、正調和楽踊り舞楽部（事務局：古河電気工業株式会社）によるアトラクション（日光和楽踊り／お囃子、踊り）などで盛り上がり、日光らしさ満載の大交流会となった。

